
刻の風見鶏

恋夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刻の風見鶏

【Nコード】

N3445V

【作者名】

恋夢

【あらすじ】

あと五分で、地球が消滅するんだってさ。かつたるいなー。俺、死ぬのか…。でも、この俺はなんと、地球が消滅する五分前にタイムトラベルしてしまった。そこで出会ったのは、どこかで見かけたことのある少女だった。

Scene - 1

『 五分後に、地球が消滅します。皆さん、落ち着いて聞いてください、五分後に地球が消滅します、全ての生物が死にます、もちろん我々も死にます』

それは、真夜中にやってきた。

さっきまでは、くだらないニュースをテレビで流していたはずなのに。

それなのに、今テレビでは、とてもじゃないが信じられないことを放送している。

『みつ皆さん落ち着いてください！例え世界が滅びようとも、我々がこのままっ、生き続けることができるように、と…！』

落ち着くのはお前が先だぞ、アナウンサー。

テレビの前の俺の方がよっぽど落ち着いている。

「意味、分かんねー…」

取り敢えず…と言ってはなんだが、カップラーメンをつくる俺。三分でできるカップラーメン、これを食べ終わる頃には、世界が消滅してるってことか？

…信じられない、よなあ。

だいたい、普通は、『あと一週間で世界が消滅します』とか言うんじゃないのか？

あと五分、って、短すぎるだろ。

もし一週間ほど猶予があつたのなら、好きなことをたくさんして暮らせるけど、あと五分しかないなら何もできない。

ただ、地球が滅びるのを待つだけ…か……。

こういつとき漫画だと、科学者やら何やらが出てきて、地球の危機を救ってくれるのだが…現実ではそう上手くいかないよな。

「で、俺達にどうしろと言うんだ」

全く。

無責任な世界だ。

はせがわわたる
長谷川航、というのが、俺の名前だ。

つい先ほどまでは、普通の高校三年生だった。

それが今では、悲劇の高校三年生。

…と言っても、俺以外の人間も皆、悲劇の主人公なのだが。

ちらつと時計を見ると、「11:58」となっていた。

確か、さっきのあの、「世界方滅」ニュースが流れたのは五十六分。

っつーことは、十二時一分に、俺の人生終了っつーことか？

…微妙。

「あと三分で、俺に何をしろと…？」

たった三分では、彼女さえ作れない。
残念なことに俺には彼女が居ない。
いや、俺がモテないのではなくて、俺の周りには趣味の悪い女しか居ないのだ。

「好きです」なんて告白されたことも何度はあったが…。
遠い昔の話だ。

「さてと、カップラーメンでも食べるか」

ちょうど今、三分たった。

それはつまり、地球滅亡まであと二分ということだ。

「いい加減な世界だよなあ、全く」

俺が言えることじゃないけどな。

そのとき、コール音が部屋に鳴り響いた。

……誰だあ？

こんな夜遅くに。

つっつか世界滅亡する直前に。

ゆっくりと立って、俺は受話器を取った。

「はい、もしもし。長谷川ですけど」

『もっしもっしかめよー、かあめさあんよおーっ』

「……は、」

はあ？

かめがどうしたんだ。

つつーか頭おかしい、コイツ。

「アンタ誰？」

『おおれえはじゃいあん！ぺんぎんむらのじゅうにんだあー』
「……………」

ダメだ、日本語が通じていない。

というか電話をかける相手を間違えているだろう。
あり得ない。

「で、どういうご用件だ？」

『今日は世界が終わるんだぞー。だからお前とアツコさんの関係もおしまいだー。ザマアミヤガレー！っへっへっへ、おれはアツコさんにかたおもいしてたんだ、バカタレが。気付けよ、ケンタロウ』

残念ながら、俺にはアツコさんという彼女は居ないし、ケンタロウでもない。

お前の気持ちに気づけるはずがないのだ。
そして今分かったこと。

コイツ、酒飲んでるな。

『おれがあ、アツコさんを、うばってやりたかったんだぞー！なにケンタロウ、おめえがアツコさんを…………っ。っ、ち、くしょー！おれは、おれはあ…っ』

「ハイハイ、すいませんでしたねえ、じゃ」

音を立てて電話を切る。

うるせえ男だ、全く。

それにしても、地球最後の日の電話が、間違い電話だとは…。
せめて最後までいい、「好きです」の電話が欲しいものだ。

って、おいおい。

また電話鳴ってるし。

さっきの男じゃないだろうなあ？

少し警戒しながら、俺は受話器を持つ。

「…こちら長谷川。どちら様だ？」

『あ、あのっ、こんばんはっ！！長谷川、わた、わた、るっ、さん
のお宅でですか！』

やけにどもりがちな声が聞こえてくる。

これは、さっきの男じゃない…??

「そうだけど？」

『す、好きですっ！！』

……ッ、きた……！

待ってました、告白！

若干声が野太いような気がするが、今はそんなことを気にしては
いられない！

「ま、馬路かつ」

『ままま馬路ですうつ！こんな“俺”で良ければ、最後の時を一緒に
過ごしませんかつ』

……聞き間違いだろうか。

今、“俺”って聞こえたような…。

「君、」

『っはい!!』

「男か」

『はい!!!!』

俺は無言で会話を終了する。

受話器をぼーんと投げ捨てて、ため息をつく。

なんだって、こんなときにホモに好かれちまうんだろうか。

俺って不運だ。

「どーでもいいけどな、もう」

あと少しだ。

あと少しで、世界が終わる。

「だけど、せめて…」

せめて、愛する人と寄り添いながら、世界と共に滅んでいききたかった。

…なーんて、今更思ってもしょうがないんだけどな。

そんな、平和な地球滅亡までの時間。

それを破壊したのは、一人の少女だった。

最初の異変は、鐘の音だった。

普段ならば、俺の住むアパートの隣にある、どでかい時計塔の鐘は閉鎖されているので鳴らない。

それなのに、今日は。

今日だけは。

何故だか。

十二時を知らせるために。

鐘が鳴ったのだ。

辺りに響き渡る大きな音。

それはまるで、世界の破滅を知らせているようで。

この鐘の音が十二回もあるのだと思うと、心底嫌になった。

このとき俺は、いつもは鳴らない鐘が鳴っているという違和感に
まるでとけ込んでいて、それが通常のように構えていた。

もうすぐ世界が終わるから、という余裕もあつたのかもしれない。

これで五回目。

あと七回で終わる。

そのときだった。

一人の少女が、“落ちる”のを見たのは。

「……………ッ、」

ふと窓をのぞいただけだった。

耳障りな時計塔を見ただけだった。

それなのに、俺の目には、あの娘が映ってしまったのだ。

夜空を華麗に落ちる少女。

黒い髪を二つに結って、白いネグリジェを風になびかせ。

落ちる少女。

後々冷静に考えてみると、その少女は、落ちるにしてはゆっくり

すぎる速度だったのだが、そんなことを今考えられる余裕はなかった。

その少女が落ちているということだけが、俺の頭の中を占領していたからだ。

そして俺は、情けないことに、どうすることもできなかった。
叫ぶことも、助けることも、何も。

ただただ、落ちる少女を見るだけで。
見守るなんてものじゃない。
ただ、“見ていた”のだ。

何てことはない。
幻覚だ。

地球が滅亡することに、多少ながらもショックを受けた俺の、華麗な幻覚だ。

そうでなかったら何なのだ。

これは現実で、実際にあった出来事だったとしても、俺は信じない。

信じない。

信じられるはずがないから。

だが、俺自身がそう思っている、動揺は抑えられなかった。

もし……もしもだが、仮に……仮に、だぞ？

これが……“現実だとするならば”。

そうすると……あの少女は何故落ちているのだろうか。

いや、飛んでいるのかも。

……それはないか、下に落下しているのだから。

ざわめく心。

落ち着かない好奇心。
騒ぎ立てられる恐怖。
全ての感覚が、俺を、動かそうとしていた。

鐘の音が聞こえる。

あと少しで、今日が終わる。

それと同時に、明日が始まって、そして、一瞬で明日が
つま
り世界が 終わるのだろう。

もう既に、鐘の音が何回目かなんて数えていなかった。
俺の目には、あの少女しか映っていない。

どうする。

いや、どうしたい、俺。

答えは一つだ。

どうせ死ぬなら 世界が破滅して俺の人生が終わってしまうの
ならば 俺は、自分のやりたいことをやりたい。

目を堅く瞑る。

行け。

行くなら今だ。

今しかない。

行けるものなら行ってみろ。

ああ、行つてやろうじゃねえか！

アパートのぼろい窓枠に体全体を乗せる。
みしっという鈍い音が響いたが、多少の損害は気にする余地もな

い。

ここは八階で、“飛び降りる”には最適の場所だな。

最後に少女の姿を確認する。

未だに落下している少女には、少しも怖がる様子がなかった。
なら。

俺にだって。

場所は時計塔のすぐ隣、最適ポイント。
なら。

俺にだって。

落ちることができるはず。

そして俺は、落ちた。

勢いをつけて。

落下 というよりは、空中浮遊に近い状態なのかもしれない。

何せ、落ちる速度が遅い。

遅すぎる。

今思えば、あの異常な速度は、時間の歪みから来たものなのだろう。
う。

だが、あのときはただただ、驚くことしかできなかった。

ふと、少女の方を見てみる。

すると、俺より低い位置を落ちている少女の姿が目映った。

良かった、居た。

これで消えてたりしたら、ホラーだ。

少し安心しながら見つめていると、その少女と目があつた。

年は十歳から十二歳くらいか。
小学校高学年程度だろう。

俺の恋愛対象にぎりぎり入っていない。
別にロリコンじゃないからな。
安心しろよ少女。

その少女は、俺を見て、一瞬驚いたような表情になったが、すぐに無表情に変わった。

なんだ？

感情の薄い餓鬼だ。

そのときだった。

俺を、強い衝撃が襲ったのは。

それが何かは分からない。
だが、ただ一つ分かるのは。
俺を、気絶させる程の破壊力を持っていたということだ。

こうして俺は、意識を手放した。

そして目が覚めると。
そこは。
地球でした。

「つて、そりゃそうだろ」

いってー…。

ここ…俺の部屋か？

…いや、違う。

いくら俺が掃除をサボっていたからと行って、ここまでほごりは積もっていなかったはずだ。

だとすると、ここは……？

そのとき、倒れていた俺を、誰かの影が覆った。

誰だ？

視線を少し上にずらすと、そこには、見覚えのある少女が居た。

S c e n e - 2 (前書き)

Scene - 2

「それで、君は何者？」

唇を真一文字に結び、無表情で突っ立っている少女。
…せめて反応をしてくれないだろうか。
こちらがむなしくなってくる。

「じゃあ、質問を変えるぞ。君、名前は？」

これまた無表情の少女。
畜生、また反応なしか。
無表情にも程があるのではないか。
さすがの俺も少し傷つく。

「まーいいや。俺の名前は、航。長谷川航だ」

少女はまだ無表情。
口を開こうともしない。
この子は、しゃべれないのだろうか、それとも、しゃべらないの
だろうか。
微妙なところだ。

「あー…君、しゃべれないのか？それとも、しゃべらないのか？」

無言の沈黙。

…気まずい、な。
やめよう、この話は。

仕方がないので、少女をじっと観察してみる。
漆黒の瞳。

まだ幼い顔つき。

…やはりそうだ。
間違いない。

この子は、

さっき落ちた少女だ。

「君、さっき落ちていたよね」

今まで無反応だった少女の肩が、びくりと震える。
通りで、見覚えがあると思った。

この少女は、つい先ほどまで、落ちていたはずだ。

「俺、見てたんだけどさ、」

あやふやだった記憶が、徐々にはっきりしてくる。
…そうだ。

確かに俺は見た。

この少女が、時計塔から落ちるところを。

…というか、空中浮遊…とても言うのだろうか。

「落ちてた、よな」

今度は確認系。

少女が、視線を下にずらしながら、ゆっくりと頷いた。

やっぱり。

自分から言い出したことだが、実際に頷かれると、少し動揺が走る。

うーん、俺ってやっぱり一般人だ。

物語の登場人物達は、こういうとき、『そうか…やはりな、俺の思ったとおりだ』とか格好良くきめてるのになあ。

「君、しゃべれるの？」

今度はふるふると首を振る少女。

うん、こちらの言葉は通じている、というか聞こえているらしい。だけど、しゃべれないというのは…結構難題だな…。

俺が頭をフル回転させていると、少女がゆっくりと、人差し指を、地面につけた。

一体何を…??

じつとその少女の指を見つめていると、その指が床にするすると文字を書き始めた。

どうやら、「永遠」と書いたらしい。

エイエン…??

何がだ…???

俺が首をかしげて、『わかりません』の意を示すと、少女は次に、「トワ」と書いた。

「ああ、エイエンじゃなくて、トワって読むのか」

こくりと頷く少女。

やっとコミュニケーションらしきものができるようになってきた。

「永遠って、君の名前？」

また頷く少女。
うん、素直だ。

「ここは何処？」

質問を変えてみる。
すると、永遠はさっきと同じように、床に指をつけ、文字をかい
た。

書いた文字は、「時計塔」。
とけいとう…ああ、永遠が飛び降りた、あの時計塔のことか。

「ここ、時計塔の内部ってことか？」

永遠が、ゆっくりと頷いた。
…どうして……。

何故、俺はここに居るのだろうか。
さっきまで俺は落ちていた。
それなのに。

今、飛び降りた場所と同じ高さの場所に戻ってきている。
何故だ。

下に降りて上に戻ってくるなどということが科学的にあり得るの
か。

「何で…、」

駄目だ。
今考えると混乱する。

何も考えるな…考えてはいけない、駄目だ…

そう思えば思っ程、俺の頭は意志とは逆に働き出す。

「何で、俺は…」

そこまで言いかけて、ハッと意識を取り戻す俺。

…そうだ。

もう一つ疑問がある。

この疑問を解決しないことには、何も 何一つ、はじまらない
し終わらないのだ。

「永遠！世界は…地球は、滅んでいないのか!?!」

勢い付けて永遠に詰め寄ると、永遠が少し困ったような表情にな
った。

「どうなんだ!?!教えてくれっ…頼む、教えてくれ…!」

世界が滅んでいないのなら。

地球が滅んでいないのなら。

まだ、希望はあるはずだから。

だから、頼むから。

こう言ってくれ。

『それは、ただの悪い夢なんだよ』

だが、現実と思った通りにはいかない。

床に人差し指をつけ、文字を書き出す永遠。
今度のは単語ではなく文章だ。

一回書いて貰っただけでは、さすがの俺にもわからない。

五回ほど永遠が文字を書き、漸く俺はそれを解読した。

ただし、その文章の意味を理解するのに、数秒時間がかかったのだが。

永遠は、「地球は五分後に滅びる」と書いたのだ。

「う…嘘だろ…」

だって、ついさっき、“五分後”は終わったはずだ。
それなのに、何で。

“どうしてまた、五分後が現れた”？

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！！これが現実だと！？あり得ない、あり得ない、あり得ねえ！！」

俺は、永遠の肩を掴んでゆらゆらと揺さぶる。

永遠は、表情も変えずに揺さぶられる。

「夢だ！夢だろ！？そうなんだろ、永遠！！」

首を左右に振る永遠。

…畜生…ッ、嘘でもいいから…例え嘘でもいいから、頷いてくれよ…っ。

「おいつなんとか言えよっおい、永遠！」

どうせならば。

地球なんか、滅んだ方が良かったのに。

地球と共に俺も滅んで。

人類もろとも、全員死んじまって。

そーゆーのって、現実世界で言うハッピーエンドだよな。

今という時代を楽しく生きているヤツにとっては、楽しいまま人生が終わるといふ最高の終わり方。

今という時代を辛いと思っているヤツにとっては、これで辛いことから解放されるという楽な終わり方。

それなのに。

なのにどうして、俺は…生き残ってしまったのだろうか。

「…なあ、永遠…」

生き残ることが、こんなに辛いことだったなんて知らなかった。死ぬことが、どれだけ楽なことなのかなんて知らなかった。俺は今、たぶん、死にたいと思っているんだ。

「俺…、」

もし。

永遠の言っていることが正しいとするならば。

「たぶんさあ、」

きつと、俺はタイムトラベルしてしまったのだ。五分前に。

そして何故時計塔に居るのは分からないが。

「楽に死にたかったんだよ、今思うとさ」

永遠の肩を掴んでいた手を放す。

不思議そうな目で俺を見つめる永遠。

…あー…ったく、さあ。

俺なんかのことを、そんなに信用するなよ。

もしかしたら、俺ってば悪い人かもしれないのにさ。

「俺って、最低だよなー」

自分でも分かってる。

俺が、運命から逃げようとしていること。

永遠を追いかけて、窓から飛び出したあのときから、俺の運命は変えられないものとなっていたのに。

どう考えても、あのときの行動は俺の意志からだ。

自業自得、それしか言葉が思いつかばない。

そして俺は、自分で背負った運命からも、逃げようとしているのだ。

「最低だけど…、これが、俺なんだよ…」

永遠が、一步俺から離れる。

…そうだよ、軽蔑してくれて結構だ。

それが正しい反応だよ、永遠。

そのときだった。

永遠が、俺に回し蹴りをしたのは。

「いつ…、てー!!」

な、何しやがんだ!!

腰に痛みが走る。

永遠、お前…っ、

俺がジロツと睨めば、永遠は指を床につけ、文字を書き出した。睨むのをやめ、その指を見つめる。

永遠が書いたのは、

「最低で何が悪い」
だった。

「何って…、悪いじゃねえか、全部」

次は頬に、鋭く鉄拳が下される。

…容赦ないな、お前。

俺があきれてものも言えないでいると、永遠がまた何か文字を書いた。

「悪いと思うワタルの心が駄目」

三度ほど繰り返し書いてもらって、ようやく理解した。

…ああ。

コイツは俺を、励まそうとしてるんだ。

まだちびっこいくせに。

ちびっこいくせに…、それなのに…。

俺は、こんな年頃の娘に、励まされようとしているのだ。

「…悪かったよ、永遠。…いや違うか…、俺が悪くなかった。うん、そつだ。悪くない。最低じゃないよ。死にたいって思うのは、人間の心理だよ。俺が悪いわけじゃない」

こくこくとうなずく永遠。

そのきらきらと光る瞳が、俺にはまぶしすぎて。

思わず目をそらしてしまった。

…だって、俺みたいな人間には、永遠の純粋な視線なんて…まぶしくて痛いぜ。

「なあ永遠、俺達…これからどうなるんだろう」

永遠が、ゆっくりと首をかしげた。

Scene - 3

さて。

まず最初にすべきことは、おそらく…現状確認、だろうな。

「なあ、永遠。この世界は、あと五分で消滅するんだろ？」

素直にうなずく永遠。

ということは、だ。

俺が倒れて、起きるまでに最低でも二分はかかったとして、それで、永遠と話してて二分くらい経ったとすると…。

あと一分くらいで、この世界は終わるというわけ、だよな。

「…っつーことは、俺も楽に死ぬるというわけか」

平凡な人間が通常の死に方を望んで何が悪い。

さっきの永遠の回し蹴り事件から、俺はすっかり開き直っていた。

だがしかし、運命とは不思議なもので、“平凡な人間”に“通常の死に方”では死なさせてくれないようだった。

あと少しだ。

あと少しで、俺は、通常の死に方で死ぬる…。

死ぬことを楽しみにしている自分がここに居る。

それは開き直ったあとでも、やはり微妙な違和感が残っていて。

そのときだった。

永遠が、急にすつくと立ち上がったのは。

「ッ、と、永遠！？どうしたんだ、急に…」

ぎゅっと俺の手をつかむ永遠。

な、何だ！？

頬がカアツと赤くなるのが自分でも分かってしまった。

いやいやいや、俺、こんな餓鬼に何を…。

「なあ、永遠、座ろうぜ？どうし、」

俺の手をつかんでいない方の永遠の腕が、ぴしっと、とある方向を指した。

それは、時計塔の階段。

…階段が、どうかしたのか？

永遠が俺の手をつかんだまま歩き出す。

それも早足に。

つられて俺も歩き出す。

って、おい、永遠！

どこへ向かう気なんだよ、お前は。

焦る俺とは裏腹に、永遠は意志を曲げずに、早足で階段へと歩いている。

「永遠、止まれっ、永遠っ、」

俺の顔さえ見ずに、階段へと顔を向けたまま歩き出す永遠。
階段に何かあるのか？

それを俺に知らせようとしている？

でも、何故そんなことが、俺の隣にいた永遠に分かる。

もし永遠にわかるのなら、俺にもわかったはず。

それとも、永遠には不思議な能力があるとか…？

……そんな馬鹿な。

「何がしたいんだっ、」

永遠。

聞いてくれ。

頼むからっ、

「永遠っ！！」

ぴたりと止まる永遠の足。

よかったとほっとするのもつかの間だ。

俺は徐々に現実気づいていく。

俺達は既に、階段の前に来ていた。

階段は螺旋階段になっている。

時計塔の外側にあつて、段と段の隙間から見えているものは、小さな家々。

高所恐怖症ではないが、この高さだとかなり怖いな。

「…なあ永遠。ここで俺に何をしろと、」

目の前の景色がガラリと変わる。

九十度…いや、百八十度ほど世界がまわる。

…え、これ、どうなってんの。

何？

俺…何が起こった？

さっきまで、俺の目に映っていた時計塔の中の景色。

それが一瞬で消えて、真っ暗闇の空が俺の目に映る。

綺麗だけど、問題は残念ながらそれじゃない。

今問題なのは、どうして空が俺の目に映っているのかということだ。

「ヒッ…」

情けないことに、俺の喉から声にならない悲鳴があがる。

だって考えて見てくれよ。

俺の下には何も無い。

さっきまで俺の上には空があったけど、今ではその空も見えやしない。

ということは、俺は完全に空に背を向けて、

落ちている、訳だ。

目を瞑ろうとするけれど、そんな余裕はなかった。

なんで俺は落ちている！？

それは…それは、永遠が俺を突き落としたからだ。

螺旋階段から、空中へと。

なんで突き落としたかなんてわからない。

知るわけない。

永遠の心を全て読めるなんて思ってたないし、そもそもつい五分前に知り合ったばかりの永遠の心を読めという方に無理がある。

…女心はフクザツだって言うしな。

っていうか、今そんなことを考えてる場合じゃないだろ。

俺は凄い勢いで落下している。

どんどんどんどん下に落ちている。

それもそうだ。

だって地球には重力というものがあって…って、だからこんな話をしている場合じゃないっつーの。

「うおおあああああつ、」

俺、永遠に何かしたか！？

そりゃ、八つ当たりはしちゃったけどさ。

許してくれたんじゃないのか！？

あーったく、これだから女は…ッ！

そのとき、俺の視界に、白い肌が映った。

……は……っ、？

「ととと、と、わっ、！」

風が口に入ってきて上手くしゃべれない。

でも、俺は賢明に声を出した。

だって、永遠が俺の隣に居たのだから。

まあ、落下している時点で隣というのはおかしいけれど…。

とにかく、何故だか分からないが、永遠も落下しているのだ。

俺と同じように。

ということは、永遠は俺を突き落とした後に、自分も落ちた…ってことか？

地球最後の日だから心中しようとした…そういうことなのか？

でも、小学生くらいの女の子がそんな大層なことを考えつくはずがないよな。

…永遠なら考えつくかもしれないが。

「あんで、おま、えっ、」

どうしてお前はここに居る。

確かに、あのまま時計塔の中に居ても俺達は死んでいただろう。

地球が滅びるのだから。

それと同時に人類も、他の生物たちも滅びていくのだから。

だが、何故落下する必要がある？

俺も永遠も。

何故落ちている？

ふと、思いついたことがある。

そういえば、最初に永遠を見たときも、永遠は時計塔から落ちていたな。

そして、俺も永遠の後を追いかけて飛び降りた。

で、気づけば…タイムトラベルしていた訳だ。

五分前に。

どうせなら、一ヶ月前くらいにタイムトラベルすれば良かった。
そうしたら、その一ヶ月間の猶予くらいは、遊んで暮らしたのに
な。

彼女つくって、デートして、友達に自慢して。

他にもいろいろやり残したことがある。

バイクの免許が欲しかった。

遊園地の絶叫マシンにも乗ってみたかった。

高くて手が出せなかった本を買いたかった。

初恋のあの子に会いたかった。

仲のいいダチとつるんで小旅行にも出かけたかった。

今思い起こすと、俺の人生って、まだまだ穴だらけだ。
完璧なんかとはほど遠いような人生。

こんな人生を、そう簡単に終わらせていいのだろうか。

穴だらけでもいい。

でも、その穴だらけの人生を、もっともつと紡いでいきたかった
のに。

俺の人生は、まだまだ果てしなく続くはずだったのに。

「死にたく、なあああああああいいいっ、」

大声で叫ぶ。

死にたくなかった。

人生を紡ぎ続けたかった。

だけどサヨナラ。

俺の未来の彼女、サヨナラ。

俺のドアチ、あばよ。

そして永遠。

たった五分間だったけど、ありがとう。

俺は、空中を落下しているはずの永遠を見た。
すると、永遠と目が合う。

そして、永遠が笑った。

俺はその笑顔に釘付けになる。

こんな笑顔、あの五分間では一度も見せてくれなかった。
こいつ……、こんなふうに笑えたのか。

今までずっと、感情の薄い奴だと思っていたけど。

それって違うんだな。

お前って本当は……きちんと笑えるんだな。

俺は、顔の筋肉に力をこめた。

そして、思いつきり口角をあげる。

さあ、笑え。

人生最後の大舞台だ。

笑え、笑え、笑え。

最上級の笑顔を見せつけてやれ。

「永遠ーっ、さんきゅー!!」

最後だけは噛まずに言えた。
よかった。

これで心残りは何もない……こともないが。

俺は目を閉じる。

さよなら、俺の世界。

そして、俺の耳に大きな爆発音が聞こえた。
それと同時に爆風も。

こうして俺は、地球と共に死んでいった

はずだった。

で。

なんで。

どうして。

何故。

疑問符が俺の頭を駆けめぐる。

意味が分からなかったからだ。

何故だ。

どうしてだ。

何が、起こった…？

「なんで、」

なんでまた、俺は生きているんだ…？

…いや、喜ぶべきことなのだろうけど。

さつき、あそこまで格好を付けた俺としては…なんで死んでないんだ？って思うのも当然だと思う。

「…っそうだ…。永遠！永遠、居るか！？」

俺が目を開けるとそこは、さつきと同じ時計塔の中。

一瞬、ホントに夢を見ているのだと思ってしまったくらいだ。

「永遠ーっ！」

ひょこつと、螺旋階段から顔を出す永遠。

…居、た…。

俺の体から力が抜けていくのが分かる。

よかった…。

って、これは安堵していいのか？

あーくそ、もう何を喜んでいいのか分からなくなってきた。

「よかった、生きてたんだな、永遠」

こくりと頷く永遠。

その表情は、さつき見た笑顔とは違い無表情に戻っている。
なんか虚しいな、俺。

苦笑しながら永遠を見ていると、永遠が床に指をつけた。

何かを伝えたがっている…？

そう思った俺は、永遠の指先をじつと見つめる。

永遠は、指でこう書いた。

「また五分前に来た」

「……また、か」

どうやら。

どうやら神様は、俺達を楽には死なせてくれなさそうだった。

やれやれ、だ。

S c e n e - 4 (前書き)

Scene - 4

何で俺達ばかりが、五分前に飛ばされてしまうのだろうか。
しかも律儀に、毎回時計塔の中らしい。

…まさか、ずっと飛ばされ続ける…なんてことは、ないだろうな。

「なあ永遠。なんで俺達、また五分前に居るんだ？」

顔を右に傾ける永遠。

分からないってことか。

神様は俺達に何をして欲しいんだか。

もし、地球が滅ぶのを食い止めて欲しいとかいう話なら、五分前
じゃなくて、一時間前くらいに飛ばして欲しい。

そもそも、神様に出来ないことを俺達にやらせるなっていう話だ
けどな。

「あー…つくそ。わっかんねーなあ、この五分間で何ができるって
いうんだよ、全く」

こうしている間にも、五分間は徐々に過ぎ去っていく。
そろそろ一分経っただろうか。

そのとき俺は、永遠に聞くべきことを思いだした。

「そつだ永遠。お前：なんで俺を突き落とした？」

あるとき。

俺は永遠に突き落とされて、時計塔から真つ逆さまに地面へと向かっていった。

その途中で、タイムトラベルしてしまった訳だが。

もしかしたら、永遠が俺を突き落とさなかったら、俺は今この五分間に居なかったかもしれないのだ。

何故永遠は俺を突き落としたのだろうか。

それも、何の迷いもなく。

普通、たった数分だとしても、自分と関わった人間を殺めるのは、多少なりとも迷いがあるはずだ。

今回の場合は、殺すというのは少し違うが。

まあ、同じようなものだと、永遠は、少しも迷わなかった。

この年で。

俺の推定だと、永遠は多く見積もっても中学生。

高校生ではないだろう。

はつきり言えば小学校高学年。

そんな子供が…迷うことなく人を殺すことができるだろうか。

いくら現代が恐ろしいからとはいえ、それはさすがにできないのではないだろうか。

それに、これは個人的な意見だが……永遠は、そんなことをするような奴じゃない。

「あのお前は、なんの迷いもなかったよな」

ゆっくりと、攻めるようではなく、ただただ問いかけるような雰囲気です。

それでも永遠は黙った。

今までも喋ることはなかったが、今度は、完全に俺とのコミュニケーションを断ち切ったという感じがした。

まるで、“そのことには触れるな”とでも言うかのように。

「なあ。もしかしてあるとき…永遠は、俺を、」

“殺そうとしていた”？

その質問はあまりに恐ろしすぎて。

結局口に出すことはできない。

だってもし、永遠が自然な顔をして頷いたら…？

背筋がゾクリと寒気立つ。

…俺は狂ってしまったのかな。

永遠がそんなことをするはずない。

出来るはずがないじゃないか。

俺は、永遠を信じているはずなのに。

「…」
「めん」

ごめん。

ごめん。

一瞬でも、永遠を信じ切れなくてごめん。

ごめん。

不思議そうに俺を見つめる永遠。
分からないならそれでいいんだ。

でも、もし…もし、気づいてしまったとしたら。

さっきの俺の挙動不審な態度に、少しでも不安を感じてしまった
としたら。

過去はもう取り戻せない。

そんなことは分かっている。

たとえタイムトラベルしたって、過去は過去なんだ。

過去が今に変わる、それはきつとあり得ない。

だって俺の隣には永遠が居る。

そして俺は、その永遠を疑った。

「…ごめん…ごめん、ごめん…」

永遠に向かって謝り続ける俺。

涙は出ないけど、でも、俺の胸はきつく締め付けられていた。

そのときだ。

永遠が俺に近づいてきたのは。

回し蹴りの件もあってか、俺の体は半歩後ろへ下がる。

…ま、まさか次は平手打ちされるんじゃない？

謝罪までもが止まってしまう。

永遠…今のお前、怖いよ？

ゆっくりと永遠の手が上がる。

平手打ちが来る…っ！！

俺は、頬に痛みが来ると予想して、ぎゅっと目を閉じた。

すると　予想していた痛みは来なくて、俺の頭に暖かい感覚が降ってきた。

…え、

「と、わ…？」

視線を上にとげると、永遠の細い腕があつた。
永遠の手が、わしゃわしゃと俺の髪を撫でる。
こしょばゆいのと、少し気恥ずかしいのとで、俺は永遠の手から逃げるように頭を傾けた。

「な、何すんだよ、」

いい年してなでなでとか。
恥ずかしいにも程がある。
そう思つて永遠を見ると、暖かい視線で返された。
永遠が俺よりも年上に見えた。
なんでか知らないけど…、凄く、大人っぽく思えた。

永遠の暖かい視線。

それが俺を包み込む。

…どうして俺は年下の女の子になでなでされてんだよ、ったく。

「俺は別に、なでな…ってか、頭撫でられても喜ばないっつーの」
なでなでという言葉を口に出すのはさすがに抵抗がある。

軽く永遠を睨むと、ちよつと笑って済まされてしまった。

…くそ、なんか悔しい。

何となくもやもやして、俺がむすつと黙ると、永遠が急に立ち上がった。

それも真剣な眼差しで。

「え…、永遠、どうした？」

きゅつと俺の手を握る永遠。

突然の出来事についていけない俺。

なんでそんな、積極的に…、

「おわっ！！」

永遠が俺の手を握ったまま歩き出した。

それに引きずられ、俺も歩き出す。

こんなことが、前にもあったような……そうだ…、永遠に突き落とされたあのときも…。

ハッとして、足に力をこめる。

これ以上、永遠の思い通りにさせてたまるか…！

あんな恐怖を、二度と味わいたくないしな。

ふと永遠を見上げる。

すると永遠は、少し寂しそうな目で俺を見ていた。

「な…ん、だよ…」

少したじろぐ。

その隙について、永遠は俺の背中に体当たりをしてきた。

「うわあっ!？」

今度は螺旋階段ではなく、時計塔の展望台から突き落とされた。
用意周到に、硝子は既に割ってある。

…普通展望台の硝子なんて割れる訳ないだろ…。

永遠、お前ホント恐ろしいな。

さすがに落下するのが三度目になると、少し慣れがやってくる。
まあいいよな。

どうせ死んじまうんだし。

気楽に行こう。

死にたくはないけど…もっと永遠と話したかったけど。

そこまで考えて、俺はそんなことを考えている自分に戸惑った。

永遠と話したい…？

いやいや、これに変な意味はないだろ、うん。

……あり得ないあり得ない。

自分の考えを、首を激しく振って吹き飛ばす。

よりもよって、こんな餓鬼に…あり得ないだろ。

ふと隣を見ると　またかよ　　永遠が居た。

もちろん、永遠も落ちている。

「永遠っ、お前また俺を突き落として…!何すんだよ!」

勢いで永遠に怒鳴ると、永遠は、まるで俺を見下すかのように笑

う。

な…なんて嫌味な笑い方するんだコイツは…。

誰かの歯ざしりの音が聞こえてくる、誰だこんなときに…と思っ
たら俺が歯ざしりをしているのだった。

小さな女の子のちよつとした悪戯（もちろん、“ちよつとした”
にも限度があるが）にここまでムキになっている自分が恥ずかしい。

「…あと、何分で世界が終わるんだ？」

敢えて永遠がわからないような質問を訪ねてみる。
すると、永遠はニヤリと笑って、指で五と示した。

…はんつ。

五分な訳ないだろう。

何故って俺がトラベルしたのは五分前で、今はそのときよりもだ
いぶ時間が経っているはずなのだから。

「違うよ、五分前じゃない。そんな嘘に騙されねえぞ、俺は」

今度は俺が、永遠を見下すように笑う。

すると永遠は、まるで、引っかったとでも言うように片方の口
角をクイツとあげた。

な…なんだよ…。

そのとき、俺は気づいた。

永遠は、五分と示していたんじゃない。

あいつは、“五秒”と示していたんだ。

案の定、俺が気づいたすぐ後に凄まじい強風が襲ってきた。
今までと同じく、俺はそこで意識を失う。

だが一つだけ、今までと違うことがあった。

…というか、俺が今まで気づかなかったただけなのかもしれないが、今回は、この目でしかと見たのだ。

俺がこの目で見たもの、それは、

永遠が…、俺の意識が途切れる数秒前に、一瞬だけ、何かを叫ぶところだった。

強風のせいで、何を叫んでいたのかは聞き取れなかったが。こうして俺は、胸に違和感を抱えたまま、意識を手放していった。

それから俺達は、何度も五分前にタイムトラベルした。

五分前、次も五分前、その次も五分前、そしてそのまた次も…と言ったふうに。

もう何度トラベルしたのか分からない程だ。

タイムトラベルして分かったことがいくつかある。

まず一つ、永遠が、俺を毎回突き落とすということだ。

しかも毎回場所が違う。

螺旋階段を少し下ったところから突き落とすこともあれば、とても小さな窓から、無理矢理押し込んで突き落とすこともあった。

それと、落下するときに、螺旋階段の手すりや展望台の硝子などが、全て綺麗さっぱり消えているということも驚きの一つだ。

次に一つ、やはり、永遠は毎回落下するたびに、何かを叫んでいるということ。

何を叫んでいるのかは未だに分からないが、とにかく何かを必死に俺に伝えようとしているのは間違いない。

それなのに、タイムトラベルしてから永遠に、『何を伝えたいんだ?』と聞くと、困ったように肩をすくめるのだ。

次に一つ、落下は、タイムトラベルに関係しているらしい。

落下するたびに俺達は、時計塔という決まった場所にタイムトラベルしてしまう。

生きているという点ではいいのだろうが…少し複雑である。

最後に一つ、これが一番重要なのだが…なんとなく、永遠の表情が硬くなってきた感じがする。

気のせいかもしれないが、なんだか、最初に出会ったときよりも元気がなくなってきた。

元から無表情なのは仕方ないが、前はもう少し…表情にゆとりがあったのに。

落下するときも、永遠はあざけ笑ったり、花が開くように微笑んだり…なかなか表情豊かだった。

それが今では、落下している最中も、何かを考え込んでいるかのような表情だけ。

このことが、目下俺の一番の悩みの種である。

そのとき、俺の肩を何かがつんつん、とつついた。

ぱつと振り向くと、そこには思い詰めた表情の永遠が。

「どうした?」

右手の人差し指を綺麗にのばし、展望台を指さす永遠。

なんとなく。

本当に“なんとなく”という直感でしかないのだが、俺はこう思った。

きつとこれが、最後の“五分前”なのだ、と。

S c e n e - 4 (後書き)

Scene - 5

最後なら最後でいいんだ。

必死でそう思おうとしている自分がいることに気づいて、俺は少し焦る。

何でだ。

何で俺は、そんなことに必死になっている？

もっと普通に、何にも興味がないように思えるはずなのに。

それなのに、俺はまるで真実を隠そうとしているかのように必死だ。

「永遠。もうすぐお別れ…なんだろう？」

俺の声まで情けなくなっている。

調子狂うなあ、ったく。

首をかしげる永遠。

無表情で首をかしげると、なんか怖いぞ。

「いい年した中学生が、お別れとか言うのおかしいかもしれないけど…さ、なんか…ちょっと、寂しい？みたいな。だから、せめて、永遠の住んでる場所とかだけでも教えて欲しい…とかいうのは、迷惑かな？」

一気に伝えると、永遠の顔がくすつと笑った。

なんとなく久々に見る永遠の笑顔。

可愛いなあと反射で思ってしまった、そう思ってしまった自分を打ち消す。

いやいやいや、永遠は小学生だし。

うん、これは、妹みたいだという気持ちの現れだな。

永遠が床に指をつける。

そこで永遠が書いたのは、「ここ」だった。

…ここ…？

何だ、ここって。

ここ…つまり時計塔…？

……それはあり得ない。

この時計塔に人は住んでいないはずだ。

時計の調節をしにくる人は居ても、さすがに住んではいないだろう。

ホームレス達も、さすがに時計塔で寝泊まりはしていない。

エアコンも食料も何もないからな。

「ここって、冗談か？」

永遠が悲しげな表情で首を左右に振った。

冗談じゃ…ない…？

どういうことだ。

意味が全く分らない。

俺が戸惑っていると、永遠がすくつと立ち上がった。

まただ…。

俺は既に、タイムトラベルと分かった次第、永遠に素直に着いて

いくことにしていた。
もう無駄に抗ったりはしない。
体力がもつたいないだろ。

でも、今回は別だ。

「おい永遠。待て」

俺が素直に、自分に着いてくると思っていたらしい永遠は、驚いた表情で俺を見つめる。

目が点、とはこのことか。

「最後だろ、この五分間は。それなら、もうタイムトラベルしたって意味がないんじゃないか」

そう言つて、俺は永遠の反応を伺う。

永遠を困らせたくはなかったが、最後まで俺の我が儘を聞いてもらえないだろうか。

さて、永遠の反応は、

……え、

「ちよつ、何で泣いてるん、だよっ！」

驚いた。

まさか、泣くとは。

永遠が焦るだろうとは予想していたが……ここまでとは。
というか、これは…俺が泣かせた…？

「あああつ、俺にどうしろとっ、」

女に泣かれたことなどない。

そもそも俺は女と関わったこと自体少ないのに。
そんな俺に何を求めているんだ…！？

「……ッ、たく、！」

仕方なく俺は永遠の頭に手を置いて、ぶつ叩いた。

パシーンツといういい音がする。

もちろん本気で力いっぱい叩いた訳じゃないが。

永遠の涙がぴたつと止まり、俺を目を見開きながら見つめる。

…しくじった、か？

…永遠だって、俺が落ち込んでいたとき回し蹴りしたじゃないか。
そのお返しだ、そうだ！

……あ、でも、永遠は2度目は頭撫でてくれたような…？

「……今回はそっちかよ」

殴る方じゃなくて撫でる方だったのな。

そう思って、俺は改めて、永遠の頭を撫でた。

サラサラの髪に指を通す。

永遠の耳が真っ赤になった。

「…どうでもいいけど、泣くのは止めてくれ。対応に困るし……、
永遠が泣くの、嫌だ」

最後はまるで駄々をこねたような形になってしまった。
でも、永遠には笑って欲しいんだよ。

あざけ笑ったり、花が開くように笑ったりしてた方が断然可愛い。

「って、まあ、俺の我が儘だけだな！」

恥ずかしさを誤魔化すために笑う。

すると、永遠もほんのりと頬を染めながら笑ってくれた。

そのときだ、強い突風が吹いたのは。

今までのときと同じだ。

ただし、今回は状況が違う。

今までは落下していたときに突風が吹いていた。

つまり、俺達は屋外に居たという訳だ。

だが今回は、屋内に居る。

時計塔の中に、だ。

時計塔は意外と頑丈で、そこまでもろくない。

だから、俺達は吹き飛ばされなかった。

足下は多少ぐらつくが、時計塔のおかげで、風の影響も少なくなっている。

しかし、突風が去ったあとにやってきたのは、風よりも恐ろしい沈黙。

「あの…さ、永遠…??」

もう、永遠の目に涙は見えなかった。

だが、その代わりとして永遠が俺を強く睨んできたが。

なかなか迫力がある。

「そろそろ、五分、経ったかなーなんて、ははは、ははっ」

時計塔に響く俺の乾いた声。

そのとき、俺の声にかぶせるように、もう一つ声がからんできた。

「つかじゃないの…」

かぼそい声。

聞き覚えのない声に、俺は首をかしげた。

顔をあげると、永遠が口を開いている。

…え。

あんぐりと口を開く俺。

だって。

だってさっきまで、永遠は何も…何も喋らなかった、のに。
そんなはずは、…。

「馬鹿じゃないの。せつかく死なずに済んだのに。そのチャンスを
自ら手放すなんて、ホント、馬鹿じゃんアント」

俺のことは見てせせら笑う永遠。

その口からは、俺の知っている永遠とはかけ離れた罵倒が飛び出
ていて。

「ちょっと、わーたーるーくーん。なになに、驚いちゃって声も出
ませんみたいな？やだ、航君ってあたしのこと好きだったの？」

その言葉に、俺はようやく意識を取り戻した。
やば、俺、完全に行っちゃったよ、意識が飛んだ。

「違っ、…別に俺は、そんなんじゃない。ていうかお前、喋れたのか？」

「うんまあね。でもあたし、口を開くと暴言ばっかつしょ？だから口閉じてたの。アンタを騙すためには可憐な乙女の路線でいくしかないかなって思ってさ」

信じられない。

こいつが、永遠か？
違うだろ。

俺の知ってる永遠は、いつも無表情で、何を考えてるのかさっぱり分かんなくて、いきなり回し蹴りしてきたり、いきなり頭撫でたり、…いきなり、すげえ可愛く笑ったり。

そついう、よく分かんないけどおもしろい奴で。

弱音とかマイナス思考とか大嫌いで、いつでも前向いてて。

そんでいつも…、俺のこと、考えてくれて。

ずっと無表情なのに、急にあざ笑ったり、微笑んだり、はにかんだり。

そついうときの笑顔がすげえ可愛くて、なんか…多分俺、

結構永遠のこと、好きだった。

始めて自覚した。

俺、永遠に恋してるんだって。
認めたくなかったけど。

でも、今の永遠は、永遠じゃない。

「永遠。目覚ませよ。何言っただよ、永遠。起きろよ」

「はあ？アンタの方が何言っただよ、なんだけど。超意味わかんない」

一瞬、永遠の目が見開いた。

ということは、やはり俺の勘は正しいというわけか。

「お前、永遠じゃないだろ」

「はっ…、ちょ、やだ、ホントに意味わかんないんですけど。アンタ何が言いたいワケ？」

急に永遠の目がクールダウンする。

よし。

若干怒っているということは、凶星ということだ。

「本物を出せって言ってる。このくらい分からないの？てめえ、永遠の真似するならもっと上手くやれよな。言っとくけど、永遠はもっと頭いいぜ」

永遠がやったみたいに。

上手く笑え、俺。

俺はしっかりと、偽物の永遠を見つめて、右口角を少しあげた。
上手く“あざ笑えた”だろうか？

「っ……、あたしを、馬鹿にしてるの!？」

頬をカツと赤くして偽物が俺に噛みつく。

「馬鹿になんかしてない。真実を言ったまで、」
「みんなそう言うんだ！あたしよりも永遠の方がいいって。みんな
そうやって、あたしを捨てていくんだ！あの人もそうだった！古
いあたしよりも新しい永遠を選んだ。あたしだって頑張ったのに。
あたしだって、風を司ろうと必死で頑張ったのに。なのに、なんで
！」

いきなり偽物が泣きながらわめいた。
はあ？

どういうことだ。
意味が分からない。

永遠の方がいいとか、あたしだって頑張ったとか。

風を司るとか。

「どういうことだよ」

「あたしと永遠は、風を司る精霊で…、最初は、あたしが風の管理
をしていたの。でも、失敗しちゃって…。そのときから、あの人は
永遠を“風見鶏”に選んだ。あたしよりも優秀な永遠を」

精霊？

管理？

風見鶏？

なんだそりゃ。

ついに頭がおかしくなったか。

「意味わかんねえんだけど」

「だから、あたしはおちこぼれで、永遠は優秀だってことよ。あた

しは、永遠に復讐がしたかった。それでこうして、永遠になりすましてる」

なりすましてる。

いつの間に？

さっきまでは、永遠だった。

でも今は永遠じゃない。

いつ入れ替わったんだ？

そのとき、俺は肝心なことを思いだした。

“もう、五分経ってる”。

「お、おい偽物！世界は…世界はなんで滅んでねえんだよ！？」

「偽物って言わないでよ！…って、あれ…おかしいわね…、…まさかつ、」

サツと偽物の顔が青ざめる。

偽物の肩がぶるぶると震えだした。

「お、おい！おい偽物、聞こえてんのか！？」

「まさか…まさか、まさか……。…もしかしたら…、空間が歪み始めてる…？」

くうかんがゆがむ。

これ以上何を言われても驚かないと思っていたが、やっぱり驚く。嘘だろ…？

どうなってるんだよ、一体。

「どういうことだよ」

「だから、あたしが永遠を…乗っ取って…そしたら…空間が歪んで

…」
「意味、わかんねえ」

…待てよ。

よく考えろ、俺。

確か、まだ永遠が永遠だったとき、タイムトラベルする前に何かを叫んでいたよな。

あれは…なんて叫んでいたんだ？

永遠の口元を思い出す。

最初の口の形は「い」行の口、次は「え」行、最後も「え」行。

つなぎ合わせると、「いええ」。

いええ…いや、これに子音を組み合わせなければ。

……、「にげて」！？

逃げてつてことは、永遠は何かに追いかけてられていて、俺を逃がしたかったってことだよな。

何かに追いかけてられていた…その何かって…まさか、この偽物か？

永遠はタイムトラベルする直前に、ハッと思いだしたような感じで叫んでいた。

ということとは、偽物が永遠と入れ替わるタイミングは、タイムトラベルする直前。

永遠は逃れようとしていたんだ。

それを俺が、タイムトラベルしたくない、なんて言ったから…。

「どおしよう…あたしじゃ、無理だ…この空間を直すには…永遠の力が…！」

…そんなの、自己中心的すぎる。

勝手に永遠を乗っ取って、勝手に泣いて、勝手に永遠に助けを求めて。

それを許せる程、俺は寛大じゃない。

「てめえ！何勝手なこと言っただよ…！そもそもはお前のせいだろ！？こうなったからには仕方ない、だから諦めよう…！そんなことを俺は望んでない！地球が滅ぶのは運命だから仕方ない、でもな、空間が歪んだとかいうのは全部お前の責任だろうが！こうなったからには仕方がない、そりゃそうだ、でもな、仕方がないからって諦めていいなんてことはないんだよ！」

そこだよ。

偽物と永遠との決定的な違い。

永遠は、諦めることを知らないんだ。

だがこいつは、諦めて人に頼るということしか知らない。

こんなのが永遠に勝てる訳ないんだ。

「わた…る、くん…」

「てめえにわたるくんなんて呼ばれたくねえ！俺が自分の名前を呼んでほしいのは、たった一人」

そこで俺は大きく息を吸った。

「永遠だけなんだよ！！」

S c e n e - 6 (前書き)

Scene - 6

「永遠だけなんだよ!!」

俺がそう言った瞬間、偽物の体がパーンツとはじき飛ばされた。別に俺がはじき飛ばした訳じゃない。そんな器用なことができるはずがない。

偽物は、勝手にはじき飛ばされたのだ。

あり得ない。

確かにそうだが、ここまで来ると何でもありに思えてくるから不思議だ。

「おい偽物!？」

慌てて近寄ると、偽物はむくりと起きあがった。

そして、俺を見て、ぱつと顔を輝かせる。

あれ…この笑顔は…。

鼓動が波打つ。

急に顔が熱くなる。

ああ、この子は…この子は、本物の　、永遠だ。

「永遠!!」

良かった。

言葉が喋れなくても、ほとんど無表情でも、やっぱり俺は、永遠がいい。

永遠は、俺の様子を見て、くすりと笑った。

だが次の瞬間には、思い詰めた表情になり、外の様子を見つめる。

「なあ永遠。偽物は…、どこに？」

永遠が床に指をつけて、流れるような仕草で文字を書く。

「居ない。元の場所に帰った。ワタル君のおかげ」 俺の名前

の漢字が分からなかったのだろう。

永遠は少し悩んでから、カタカナで俺の名前を書いた。

「俺のおかげ…か。いいことをしたって訳じゃないんだろうけど、まあいいか」

そう言つと、永遠はふるふると首を振る。

良くないってことか？

え…俺、どうすれば…。

すると、永遠がまた床に指をつける。

「ワタル君悪くない。悪いのは私。ごめん」と、永遠の指が文字を書く。

だんだん永遠の字も読み慣れてきた。
慣れると簡単だな、意外と。

「永遠のせいじゃないよ。謝らなくていい」

そう言つて俺が笑うと、永遠も困ったように笑った。

そして、「私止める」と書いた。

……え？

「ちよっ…おい、と、永遠!？」

俺が永遠に手をのばす。

その手を振り払って、永遠はゆっくりと、展望台に向かって歩き出した。

行かないでくれ。

そんなことをつい思ってしまったのは、俺が自分の気持ちに気づいてしまったからだ。

かと言って、そのことを後悔する訳では決してない。

永遠にはきつと、この歪みとやらを止めることができるのだろう。それは俺にも分かる。

でもきつとそれは、容易いことではないはずだ。

もしかしたら…永遠の命を削ってまでの仕事かもしれない。

そんなのは嫌だ。

俺を助けるために、とか。

世界を救うために、とか。

そういうのはいらない。

俺はただ、側に居たいだけ。

そんな俺の心を無視して、永遠は展望台の硝子に手をかけた。すると、硝子がいい音をして割れる。

うおっ!？

そうか…この能力で硝子を割ったり階段の手すりを壊したりして

たのか…。

まさか、偽物をぶっ飛ばしたのもこの能力！？

そのとき、永遠が、こちらを向いた。

と…わ…？

かすかに微笑む永遠。

強い風が、時計塔の中に入り込んでくる。

俺は吹き飛ばされそうになりつつも、なんとか踏ん張って、永遠の目を見た。

なあ。

お前のことが好きだと言ったら、お前は笑うか？

好きになるつもりなんてなかったし、そもそもそんな可能性など考えてさえいなかった。

永遠。

俺、本気なんだと思う。

だから行くな。

俺、そばに居るから。

だから行くな。

永遠の口が開く。

俺の目がそれに吸い付けられた。

『だ い す き』

永遠の口がそう語る。

一瞬俺は啞然として、それからハッと意識を取り戻した。

…俺は言えなかったのに。

どうしてお前は、簡単にその言葉を口に出せるんだ。

自分が本当に情けない。

「永遠 ツツツ!!」

永遠が、軽く一步踏み出す。

そして、空間の歪みに、巻き込まれるようにして外へと飛び出していった。

次の瞬間には、目映い光が辺りを包み、そして俺は、叫んだ。

腹の底から。

心の中を。

叫び尽くす。

「行くな、ッ、！」

その声は途中で途切れる。

…サヨナラも言えない恋もある。

ありがとも言えない恋もある。

自分の気持ちを、素直に言えなかった恋だつてある。

またいつか。

そう心の中で思いながら、俺の意識は遠ざかっていった。

「おーい航ーっ」

「んあ？」

「よつす。なんだよ、朝から寝ぼけちゃって。お寝坊さんだな！」

「うぜー。朝からテンション高すぎだろお前。俺の前から失せろ」

「ひどい！ひどいわ航君、俺と君との仲じゃないか！」

「お前と俺とはなんの仲でもない。ただの他人だ」

朝から絡んでくる友人を適当にかわしながら、俺は一つため息をもらした。

気づけば、朝だったのだ。

何もなかったというふうに朝日は昇っていて。

何もなかったというふうに一日が始まっていて。

まるで、あの“五分間”がなかったような。

あれが夢だと思えたら、どれだけ良かったことだろうか。
だけどそうではない。

俺、永遠のこと、好きだ。

忘れられないっつの、あの笑顔。

「おい、生きてるか、航」

「生きてるよ、当たり前だろ」

「だって死んでるみてーだし。なんかあった？」

「別に？お前に言っただって、何も……何も、変わらないんだよ」

そう。

これはコイツに相談したって何も変わらない。

それだけじゃなく、コイツ以外の誰に話したって、何も変わらないのだ。

俺を救えるのは、永遠だけなのに。

それなのにあいつはここに居ない。

世界を救うよりも、俺がそばに居たかった。

空間の歪みを直すよりも。

…永遠の馬鹿野郎は、空間の歪みを直すと同時に、世界まで藻を救ってしまったらしい。

偽物が言っていた、風？を司ったか何かしたんだろうな。

俺がタイムトラベルしたのも永遠のおかげだろう。

タイムトラベルさせるために屋外へと連れ出したのは、時計塔の中では風が吹かないから。

そついうことだろう？

「あんだよ。今日の航つてば、ご機嫌ナナメ、なのな」

「そうだよ、何か悪いか」

「逆ギレかよ！もういい、俺、他の奴と学校行く！じゃーな、航君！」

「おーう。またなー友よ」

「……あのさつ、！」

走り出した瞬間、こつちを振り向く阿呆。

…あのな、自分から先に行くとか言っておきながらやっぱり一緒に、とか言つなよ。

いい年した男子が恥ずかしいだろうが。

「…何かあったなら、俺にも相談しろよな、ばーか！！」
「……」

…馬鹿はどつちだ、馬鹿。

でも、なんとなくいらした気分が少しだけ晴れた。

決してあの馬鹿のおかげではないけどな。

あいつが走り去ってから、俺は空を見上げた。

この世界に、永遠は居るのだろうか。

…居ないだろうな。

ここじゃないどこかの世界に…居るよな、きっと。

信じてる。

なんて簡単に言えない。

だって分かんねえじゃん。

俺には…永遠のこと…。

よく考えたら永遠の名字も、年齢も…何一つ知らないのだ、俺は。

「永遠…」

どこに居るんだろうな、永遠は。

…あーくそ。

永遠が無事で生きていてくれればいい、そんな綺麗事は言わない。
頼むから帰って来いよ。

帰ってきて俺の隣で笑え。

俺のこと、好きなら…行動で示せよ、まったく。

はあと一つため息をつき、俺は視線をずらし、時計塔を見上げた。

すると　とあるものが目に飛び込んできた。

それは、…風見鶏。

前まではなかったはずの風見鶏が、凜として、時計塔の上に立っているのだ。

風に揺られて、ゆらゆらと向きを変えながら。

自分の目が見開かれていくのが分かった。

ああ。

永遠。

お前、“風見鶏”なんだろう？

風を司るだけじゃなくて、きつとお前は…俺に、風の位置を教え
てくれたんだろう？

気づけば、俺の足がかけ出していた。

授業なんて知るか。

今動かなくていつ動く。

あのとき伝えられなかった想いを…今、

「永遠ッ、」

時計塔は高い。

階段しか上にかかる方法はない。

でも俺、行くから。

だから今度は、俺を置いて行くな。

待ってる、なんて言っても待っていてくれないだろうから、俺、
急ぐよ。

お前のこと、捕まえるために、急ぐよ。

「俺ッ、」

喋れないことを気にせず、綺麗な字を書く永遠が好きだ。

まるで俺を見下しているかのような、少しいらつく笑顔を見せる

永遠が好きだ。

たまに見せてくれる、心底幸せそうな笑顔の永遠が、好きだ。

「好きだから！」

階段を駆け上る。

頂上はまだ遠い。

でも息が切れてくる。

それでも俺は叫び続けた。

「だから俺っ」

息が切れても、声が枯れても、叫ぶことをやめちゃ駄目だ。

そこでやめたら終わってしまう。

だから俺は、やめない。

「追いかける、から!!」

追いかけたいんだ。

お前の背中。

意味わかんないことやってくれるし、意味わかんないこと言ってくれるけど。

けど…っていうか、だからこそ、追いかけたい。

「今度は、待ってるよ!!!!」

最後の言葉を呟いた瞬間、俺の体が 浮いた。

風に乗って。

「うお!?!」

俺の体が風に乗って、階段をどんどん上る。

さ…さすが…。

超人技。

っていうかやっぱり、人間じゃないだろお前。

そう思いながらも、俺は笑いが止まらなかった。

あーおかしい。

笑うしかないよ、ホント。

「永遠　！」

雑に、時計塔の頂上へと放り出された。

こ、腰打ったんですけど…。

いつてえなあ。

そのとき、俺の目に飛び込んできたのは、正真正銘…本物の…、
永遠だ。

永遠が笑う。

照れくさそうに。

永遠が手をのばす。

おずおずと、ゆっくり。

そして俺は、その手を掴む。

「待っててくれて、さんきゅ」

手を握りながら喋る。

永遠が目を泳がせた。

畜生、可愛いなあ全く。

「それと、俺も、好きだよ」

この手を掴んだ。

時間の波にもまれても、俺はこの手を掴んだんだ。

宇宙は広い。

だから、俺が知らないこと、まだまだいっぱいあるはずだ。
永遠のことだって、俺はまだ、何も知らない。

でもいいんだ。

これから、たくさん知っていくから。

「追いつくまで、時間かかると思うけど、」

俺、馬鹿だから。

覚えるのに時間かかると思う。

ごめんな。

でも

「待っててくれる…かな？」

永遠が待っててくれるなら、俺は頑張れるよ。

永遠は、びつくりしたような顔をして、そして、俺の好きなあの
顔で笑った。

永遠えいえんにお前のこと、追いつけるから。

宇宙の果てまで。

だから待っててください。

いつか俺が、君を超える日まで

f
i
n
.
.

Scene - 6 (後書き)

や…やつと完結です…。

遅れてすいませんでした！！

それと…こんな、「準SF」みたいなものではないです…。

タイムトラベル…一応SFですよ…？違います？

サイエントフィクションの意味を勘違いしてますか、私。

ヒイそうだったら申し訳ないです。

ていうか…切ギリギリすぎて…ちょ。

焦った焦った

まあ。

今回初のお祭りは。

ちょっと失敗？に終わっちゃいましたが。

次は頑張ります！！！！（）

で、おもしろいとしても思ったら…読者投票、などなど…（「によ」によ）

よろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3445v/>

刻の風見鶏

2011年9月4日13時44分発行